

環境学習は、自分たちの暮らす場所をよくしていくために必要な手段。自発的な学習と行動が、自立した市民社会をつくる。

環境学習からまちづくりへ

市民がつくる、まちの環境プラン

埼玉県 志木市

東京・池袋まで東武東上線で三〇分弱、面積九平方キロメートル、人口約六万四〇〇〇人を擁する埼玉県志木市は、かつては農業と新河岸川の舟運で栄えた街である。しかし今では、その面影はほとんどない。宅地開発の波に吞まれて、市内に残る樹林面積は武蔵野台地と低地との間に点在する斜面林や屋敷林など、一パーセント弱ほど。他の首都圏近郊の街同様に、急速な都市化のなかで、街の特色を失いつつあるベッドタウンの一つである。

ところが、こうした状況がかえってこの街に活気を生み出している。環境破壊を危惧する市民によって、「志木子どもたちに自然を残す会」や「農業を考える市民の会」など、いくつもの環境保全団体が結成され、早くから活発に市民活動が展開されてきたからだ。



上流の清瀬市に下水処理場ができたため、清流を取り戻しつつある柳瀬川。



「いろは親水公園こもれびのこみち」。驚くほど緑が深い。

誰もが主役になれる組織づくり

また、行政もこうした市民の働きに応えるかたちで、一〇年以上前から市民参加のまちづくりを積極的に推し進めてきた。今年三月には、一般公募の市民二六名で、「環境市民会議」を組織して、市民の手による環境基本計画を策定するなど、市民主導型の環境まちづくりが実践されているのである。

とりわけ、環境市民会議のなかで中心的な役割を演じてきたのが、「エコシティ志木」のメンバ

ーだ。エコシティ志木とは、九三、九四年度に、志木市が文部省から「環境教育推進モデル市」に指定されたことを受けて開催した「環境大学」で出会った市民が中心になって発足したNPOである。約三〇名でスタートした会員数は、現在一一〇名。その活動は、「水と緑」「ごみとエネルギー」「保健・医療・福祉」「まちづくり・環境学習」の四つの部会から成り、「ワールドワーク」と「ワークショップ」の二本柱を基本に、じつに多岐にわたる活動を展開している。

「一口で活動を説明するのは難しいですね。特徴的なのは、各部会がそれぞれ独立したかたちで活動している点でしょうか。とにかく、やりたいと言いついた人が中心になって、次々にプロジェクトが立ち上がってくる。参加する誰もが主役になれる柔軟な組織なんです」と、代表を務める毛利将範氏（まさのり）は言う。

たとえば、ある月のスケジュールを見ると、「ごみとエネルギー部会」「柳瀬川ウォッチング」「学

校ビオトープ視察」「柳瀬川生き生きマップ野草調査」など、ざつと一〇日分もプログラムが組まれている。会員のほとんどは仕事や主婦業の時間をやりくりして活動に参加しているため、すべてに参加することは難しい。絵本作家として活躍する毛利氏も、それは同じである。したがって、それぞれの部会を代表するメンバーが定期的に集まることでコミュニケーションをとるが、基本的な活動についてはそれぞれの部会の自主性に任せているのだという。

その活動の一端を紹介しよう。まず、「柳瀬川ウォッチング」。月に二回、柳瀬川の河川敷四〜五キロほどを、鳥や昆虫の種類、数などを記録しながら歩く。時間や場所を決めて観察し続けることで、季節や年ごとの変化を知ることができるうえ、渡り鳥の種類や数も把握できる。この調査で、冬には約一〇種、一〇〇〇羽のカモたちがシベリア方面から渡ってきていることが確認できた。これまで二年間欠かさず続けてきたが、今年度中に報告書を作成する予定だという。また、市教育委員会、埼玉県生態系保護協会の志木支部と連携して、毎月、柳瀬川河川敷周辺の野草調査も手がける。水田近くの草むらや河川敷の草地など、四カ所については定点観測もおこなっている。

その一つ、柳瀬川と新河岸川の



志木ニュータウン東の森沓番街で堆肥づくりをする天田氏。

合流地点近くの観測場所、「いろは親水公園こもれびのこみち」を訪ねた。この公園は、地域の町内会や環境保護団体など八団体の意見をもとに九二年に整備されたビオトープである。地下から湧き出す水が辺りを潤し、マンションと新河岸川の土手のわずかな隙間に、驚くほど豊かな緑陰をつくりだしている。ふと見ると、目の前のアジサイに黒い羽根のトンボがとまっていることに気づく。

「ああ、あれはハグロトンボですよ。珍しいなあ。これまでトンボは一八種が確認されていますが、ハグロトンボを志木市で目撃したのはこれが二度目です」と毛利さん。期せずして珍しいトンボと巡り会い、湧き水のありがたさを実感する。住宅地であっても、わずかな緑と水があれば、十分に昆虫たちの棲息場所になりうるのである。

落ち葉は「リリリ」じゃない

もう一つ、エコシティ志木が進めているプランに「おちば公社」がある。東武東上線柳瀬川駅近く、志木ニュータウン東の森沓番街では、十二年ほど前から、共用スペースに植栽された樹木の落ち葉を利用して堆肥づくりが進められてきたが、これを手本にして、その事業化を推し進めている。そもそも東の森沓番街で堆肥づくりが始められたのは、住民の中に植栽の管理コストを切り詰められないかという思いと、植栽業者による農薬散布を危惧する声があり、管理組合の手で植栽の管理をおこなうことにしたのがきっかけだった。そこで、住民の一人である天田眞氏が、大量に出る落ち葉に目をつけ、堆肥づくりを始めたのである。「最近では堆肥の量も増えて、う

ちの街区の植栽分だけでは使いきれなくなったので、去年の秋頃から自由に持つていってもらうようにしたので、あつという間に半分は減ってしまいました。ガーデニングや家庭菜園などに使われるのでしょね」と天田氏。確かに、落ち葉の堆肥であれば臭いもなく、使いやすい。なにより、志木ニュータウンの七つの街区のうち、この街区だけ際立って緑が濃いのがよくわかる。農薬を散布していないので、樹液が出る木にはカナブンやカブトムシが、実のなる木には鳥が群がる。堆肥にはカブトムシの幼虫もいる。団地の共用スペースというより雑木林に近い。もちろん堆肥づくりは手間のかかる作業だが、ゴミの減量化という点においても、自然の再生という点においても、じつに優れた手法といえるだろう。

現在、エコシティ志木では、行政と連携しながら、二〇〇七年のおちば公社の本格的な始動に向けて、啓蒙活動や資源化のマニュアルづくり、農家や市民農園などの受け皿の確保を進めている。

市民の自主的な環境学習を具体的な政策の提案・実現へと結びつけてきたエコシティ志木の活動は、「自立した市民社会」のさきがけとして学ぶべきところが大きい。

(文)田井中麻都佳、写真)坂本政十賜